

《翻 訳》

センチメンタル ジャーニー (完)

——フランスとイタリーを巡るヨーリック師の旅——

ローレンス スターン作

小 林 亨 訳

パ リ

私達は人に奉仕するというよりも、むしろ奉仕されることで世の中を渡って行く。つまり人は枯れそうな小枝をとってそれを地面にさし、それから水をやるが、それは人が自分でそれを植えたからである。

B…伯爵は、旅券の件でわたしに親切を示してくれたというそれだけの理由で、引き続きもう一つ親切を施してくれて、パリに滞在された数日の間に、数人の身分ある方々にわたしを紹介して下さったのである。それから、その人達はまた別の方々にわたしを紹介して下さり、それからまた順々に紹介して行って下さったという次第。

わたしはお世辞を使う秘訣を丁度うまい具合に会得したところで、こういった知遇をすこし利用するのに間に合ったわけである。そうでなかったら、普段よくあるように、一度か二度食事を共にするだけで、フランス人の顔付きや態度を易しい英語に翻訳し、それによって、わたしよりもっと楽しいお客のための「^{クーズェール}陪食」* にありつけていることに直ぐさま気がつき、そのうちにこうしてはいられないと考えて、次々に招待の席を断わるようになったであろう。——ところが実際には、万事が順調に進んでいったのである。

わたしは B…老侯爵に紹介される栄を賜わったが、彼はそのむかし、「恋^{クールダムール}の斗技場」でちょっとした武勲をたて有名を馳せ、それ以来、晴れの槍試合に

備えてさかんに着飾っていた——そしてB…侯爵は、その恋愛事件は彼の頭の中でなくどこかで現実に起ったものであると人に思って貰いたかったのである。「イギリスへ旅行してみたいものですね」とおっしゃって、イギリスの女性についてわたしに色々な質問をした。侯爵様、どうかこのままじっとしておいでになって下さい、とわたしは言った——『イギリスの男達』はいまのままでも、女の人から優しい顔ひとつ見せて貰えないんですから。——侯爵はわたしを晚餐に招待して下さい。

徴税史のP…氏は、B侯爵が女性に対するくらいに、イギリスの税金について様々の質問をしたがった。——イギリスの税金はかなりの額なんだそうですね——もしイギリス人があなたほど税金取り立ての方法を知っていればの話ですが、とわたしは答えて深く一礼した。

このお世辞を言わなければ、わたしはP…氏の音楽会に招待されなかつたらう。

わたしは「機^キ智^チに富^トんだ人」であるというふう^{ブリ}にQ…夫人に誤り伝えられていたが——Q…夫人自身機智に富む女性であった。それで彼女は躍起になってわたしに会ってわたしの話を聞きたがっていた。ところが実際には、わたしが席に腰をおろすと、もうわたしに機智があるかどうか彼女は全然気にもとめなかった——彼女が機智に富んでいることを納得させられるようにわたしは招待されたのであった。——それでわたしは断乎として口を閉じていた。

その後Q…夫人は、会う人毎に断言したものである。「わたくし、いままでに殿方とあれほど進歩的なお話をしたことは御座いませんわ。」

フランスの女性という帝国には三つの時代があり——それは浮気の時代——次に不信心の時代——それから「信心」の時代である。そしてこの三つの時代を通して帝国は決してなくならない——彼女達はただ臣下をとりかえるだけである。つまり、三十五才をすぎるとその領土から恋の奴隷をとり除き、不信の奴隷を代りに住まわせ——それからこんどは教会の奴隷を住まわせる。

V…夫人は、この三つの時代の最初の変化期でゆれ動いていた。バラ色はずでにうつろいかかり——わたしが初めて訪問の榮に浴した時は、五年前に不信

心家になっている筈であった。

彼女は自分と同じ長椅子にわたしをかけさせたが、宗教の問題をより綿密に論じようとしたためであった。——つまり、V…夫人は何んにも信じていないということをわたしに語ったのである。

わたしはV…夫人に次のように言った。それはあなた様の信念で御座いませう。しかし城の外堡を平らにしてしまうのは、あなた様の御利益にならないことは確かです。というのは、それが無ければ、どうしてあなた様のような魅力のあるお城が守れるか、わたくしには考えられませんし——美しいお方が不信心になるほど危険なことはこの世にないと思います——これは隠さないのがわたくしの信念なので申し上げますが——あなた様のおそばでこの長椅子に腰をおろしていると、五分とたたないうちに、けしからぬことを考え始めてしまうのです——そしてそおいうたくらみが起きるのを抑えることが出来たのは宗教心であり、宗教心があなた様の心に引き起した信仰にほかなりません。

私達は金剛石のような堅い物質ではありません、とわたしは言って彼女の手を取った——ですからあらゆる抑制というものが必要なのですが、やがて頃合よく老齡がしのびよって私達を抑えてくれます——しかしあなた様には、と言ってわたしは彼女の手に接吻した——あなた様にはまだ——まだ早すぎます——

断言してはばからないが、わたしがV…夫人を正しい信心につれもどしたという評判はパリ中に広まったのである。——彼女はD…氏やM…師に、三十分ぐらいでわたしがあらゆるフランスの百科全書に書いてある啓示宗教¹⁾に対する反対論よりも、もつと多くの擁護論を述べたと断言した——そしてわたしは直ちにV…夫人の「^{ソサエテリ}社交界」に加えられ——彼女は二年間だけ不信心の時代を延期したのである。

この「社交界」でのことだったと記憶しているが、わたしが「第一原因・創造主²⁾」の必要性を示そうと論じている最中に、若いフェネアン伯爵がわたしの手を取ると部屋の片隅へ連れて行って、わたしの「襟止めピン^{ソリテール}」があまりきつく首にとめてあると言ってくれた——もつと「派手」なのがいいでしょう、

と自分の襟止めに眼をおとしながら言った——でもヨーリックさん、「賢者」にはひと言で足る、といたしますね——

それに伯爵様、賢者からはひと言——で充分です。わたしはそう答えて一礼した。

フェネアン伯爵は、これまでどんな男もしたことの無いほど熱烈にわたしを抱きしめた。

三週間連続して、わたしは会う人毎に賞讃された——『まったく！ ヨーリックさんは私達と同じ様に機智に富んでいらっしゃる』——『彼の議論はたいしたものだ』と別の人が言った。——『彼は人柄がいいよ』とまた別の人は言った。——こんな風にお世辞を言っていれば、わたしはパリで一生涯食べたり飲んだり、楽しく暮していけたらう。しかしこれは不正な「勘定書」である——それでわたしは恥かしくなっていた。——これは奴隷の儲けであって——わたしの名与を重んじる心はそれに反対した——身分の高い人と交われば交わるほど「乞食みたいなやり方」を余儀なくされ——「仲間」が上等になればなるほど——虚飾に満ちた連中が多くなっていった——わたしは自然の情に富んだ人達が無生に恋しくなった。そして或る晩、六人ばかりの色々な人達にひどく浅ましくお世辞を使ったあとで、わたしは胸くそ悪くなり——寝床に入り——翌朝馬を仕立てるようラフルールに命じイタリーへ出発することにした。

*(原註) 皿，ナプキン，ナイフ，フォーク，スプーン。

マリア

ムーラン

何んにせよ一つの形をとつたもので、物が豊かすぎて困惑するということを、わたしはその時まで知らなかった。——フランスの最もすばらしい所、ブルボンヌ地方を——葡萄収穫期のまつ盛りに旅したのであった。この時自然はあらゆる者の膝に豊かな実りを注ぎ、あらゆる眼はすべて空を見上げて——一步一步地面を踏みしめて歩けば、音楽は「労働」に合わせて拍子を取り、自然の子供達は葡萄の房を採みとりながら喜びさざめている——心は宙に舞い、眼

の前にいる男女の人群れには照りながら、わたしはこういう情景の中を歩いて行ったのだ——そしてその人達の誰の胸にも愛のたくらみが溢れていた。

本当に！——このような描写をしていたら二十巻もの本を埋めつくすであろう——ところがどうだ！ わたしにはそれをつめ込むのにほんの数頁しか紙数が残されていない——しかもその半分は、わたしの友人シヤンディ氏³⁾ がムーランの近くで出会ったあの哀れな マリアの話に当てなければならないのである。

あの狂った娘についてシヤンディ氏の語った物語は、読んでいるうちにわたしをひどく感動させた。しかも彼女の住んでいる所の近くに着いた時、その話は強烈にわたしの心によみがえって来たので、一哩半ばかり寄り道しても、彼女の両親の住んでいる村を訪ねて彼女の消息を辿ってみたいという衝動を押えきれなかった。

これはまるで、心を重くする冒険を求めるあの「悲壮な顔立ちの騎士」ドンキホーテみたいだと自分も認めるのだが——わたしはそういう冒険にまき込まれる時ほど、内部の魂の存在をはっきりと気づくことはないのである。

年老いた母が戸口から出て来たが、彼女の表情は口を開く前に物語をわたしに語っていた——すでに連れ合いを亡くしていたが、その夫は一ヶ月ばかり前に、マリアの気が触れたのを苦にして死んだとのことであつた。——老母は、父親の死がマリアに残されているささやかな理性まで奪ってしまうのではないかとはじめは心配した、とつけ加えて言った——ところが、反対に彼女は正気をすこしとり戻したのであつた——けれども尚、彼女はじつと落ち着いてはいなかった——可愛想な娘は、どこか道端をうろついているでしょう、と老母は涙を流しながら語つた——

——この話を書いていると、どうしてわたしの脈拍は弱々しく打つのだろうか？ その老母が立つてこの話を語っていた時、楽しいことだけに心が向くようにみえたラフルールが、どうして手の甲で二度も眼をこすつたのだろうか？ わたしは道路に引き返すようにと御者に合図した。

ムーランから一哩半と離れてない所まで行くと、道が拡がって藪へ続く道が

別れる所で、わたしは哀れなマリアがポプラの木の下に坐っているのを見つけた——彼女は膝に片ひじをついて頭を一方にかしげて掌にのせていた——小川が木の根元を流れていた。

わたしは御者に先に馬車でムーランへ行っているように命じ——ラフルールには夕食を注文しておくように言いつけ——わたしはあとから歩いて行くと言った。

彼女は白い服を着て、わたしの友人シャンディ氏が描いていたのとまったく同じ姿であったが、ただ以前は絹の網で束ねていた髪をいまは垂らしたままにしていた。——彼女はまた上衣の上に薄緑色のリボンを肩から腰へとかけていて、その端には笛がついていた。——彼女が飼っていた山羊は恋人と同じように不実だったので、山羊の代りに小さな犬を連れていて、それを彼女は紐で自分の帯につないでいた。わたしがその犬を見た時、彼女は紐を持って犬を引き寄せた。——「シルヴィオ、わたしをおいて行かないで」と彼女は言った。わたしはマリアの眼を見たが、彼女は恋人や山羊のことよりも父親のことを考えているらしいことをわたしはみてとった。というのは、そう言った時、涙が彼女の頬をしたたり落ちたからである。

わたしは彼女の傍に腰をおろした。そしてマリアはわたしがハンカチで彼女の涙をふくままにさせていた。——それからわたしは自分の涙でハンカチを濡らし——それから彼女の涙で濡らし——またわたしの涙で濡らし——それからまた彼女の涙をぬぐい——そしてそうしている間に、物質と感情とのどんな組み合わせによっても決して説明出来ないような、名状しがたい感動を心に覚えたのであった。

わたしは魂を持つていることを確信する。そして唯物論者が世間を毒しているあらゆる書物も、これに反対する考えをわたしに納得させることは出来ない。

マリア

マリアがすこし正気に戻った時、二年ばかり前に彼女と山羊との間に坐った

ことのある青白い顔の痩せた人を覚えているかい？ とわたしは訊ねてみた。彼女が言うには、その頃彼女はかなり気がふれていたが、そのことは二つの点で覚えているということだった——一つは、彼女の頭の具合は悪かつたけれど、その人が彼女をあわれんでくれるのが分ったこと、第二に、彼女の山羊がその人のハンカチを盗んでしまったので、その悪さをしかって山羊をたたいたこと——彼女はそのハンカチを小川で洗って、その人にまた会った時に返そうと思って、それ以来ずっとポケットに持っている。と言った。そしてその人はもう一度会おうと約束したのだと彼女はつけ加えて言った。その話をしながら、彼女はポケットからハンカチをとり出してわたしに見せてくれたが、それは二枚の葡萄の葉の間にきちんとたたまれて、まわりをつるでしばってあった——それを開いてみると、ハンカチの隅にSというしるしが見られた。

彼女の話によると、それから彼女はローマまで遠路をさまよい歩き、聖ピーター寺院も一巡し——それから帰途について——一人でアペニン山脈を越えて——一文なしではるかにロンバルジャ平原を旅し——靴もはかないでサボイの石ころだらけの道を通って来たという——どうやってそういう一人旅に堪えられたのか、どうやって途中の暮しをして来たのか、彼女にも分らないと言うのだった——しかし「神様は」毛を刈られたばかりの羊には「風を和らげて下さいます」とマリアは言った。

ただ毛を刈られたどころぢゃない！ 皮もはがれたようなものだ、とわたしは言った。そして、お前がわたしの国にいるのなら、わたしには小さな家もあることだし、連れて行って泊めてやりたい、それならわたしのパンも分けて食べさせられるし、わたしのコップで水も飲んでもらえるんだが——またお前のシルヴィオもかまってやれるし——お前の頭の具合が良くなくさまよい歩く時には、探して連れ帰ることもするんだが——太陽が沈んだら、わたしはお前の為にお祈りをし、お祈りをしたらお前は笛で夕べの歌を吹ける。そしてわたしの捧げる祈りが、失恋の思いに泣く者の祈りと一緒になって天に届いても、その為には神がお聞き届けにならないことはないだろう。

わたしはこう言うと、自然の感情が心の中でほぐれていくのを感じた。そし

てマリアはわたしがハンカチを取り出すと、それが用を足さないほど涙で濡れているを見て、小川へ行って洗ってくると言ってどうしてもきかなかつた。——それで、どこで乾かす気なんだい、アリマ？ と訊ねると——胸にあてて乾かしますわ、と彼女は答えた——そうすれば心が安まりますから。

マリア、お前の胸はまだそんなに熱いのかい？ とわたしは言った。

わたしは、すべての哀しみを含んだ彼女の心の琴線に触れたのであった——彼女はしばらくわたしの顔を落ち着かない様子で見つめていたが、それから何も言わずに笛を取り上げると、聖母マリアの祈りとして——一曲吹いた——わたしの触れた心の琴線は共鳴するのをやめ——しばらくしてマリアは正気に戻り、笛をおとして——それから立ちあがった。

それでマリア、どこへ行くの？ とわたしは訊ねた。——ムーランへ参ります、と彼女は答えた。——じゃ一緒にいこうよ、とわたしは言った。——マリアはわたしと腕を組むと、引き綱をゆるめてその犬がついてこられるようにして——そんな恰好でわたし達はムーランの町へ入って行った。

マリア

ムーラン

わたしは、町の広場などの賑いの中で出会いや別れの挨拶をしたりするのはいやなのだが、その時はわたし達が町の真中に来た時、わたしは立ち止ってこれが最後とマリアの顔を見つめ、そして最後の別れの言葉を述べた。

マリアは背は高くなかったが、しかしこの上なく美しい容姿をしていて心の悩みが一種近よりがたいものをその表情に与えていた——それでもやはり彼女も女性であった——それで、彼女には男性の心が女性に望み、男性の眼が女性に求めるあらゆるものをすっかり身に備えていたので、もし彼女の頭から恋の記憶が消えさり、わたしの頭からエライザの思い出が消えさるようなことがあれば、彼女に「ただわたしのパンを食べさせ、わたし自身のコップで水を飲まずだけでなく」わたしの胸に彼女を休ませ、わたしにとっては娘のようにしてあげたいと思った。

さようなら、ふしあわせな娘よ！ ——見知らぬ旅人の同情が通りすがりにいまお前の傷口を癒そうと注ぐ油と葡萄酒を受けいれておくれ——二度までもお前を傷つけた神だけが、独り永遠にその傷を癒すことが出来よう。

ブルボンヌワ地方

フランスのこの地方を、葡萄の収穫期に旅することほど、心も踊る感動の嵐を想像していたことはなかった。マリアの悲しみの門を無理に通ってこの地に出てみると、わたしの苦悩はまったくわたしを場違いの者にしていた。つまり、どんな楽しい情景にもわたしはその画面の背景には、マリアがポプラの木の下に悲しげに坐っているのを見るのであった。そして、ほとんどリヨンに着くまで、わたしはマリアの姿を忘れることが出来なかった——

あゝ感じ易い人の心よ！ お前は私達の喜びの中にある貴重なもの、悲しみの中にある高価なものすべてが尽きることなく湧き出る泉なのだ！ お前は、お前にいのちを捧げる者をわらの床につなぎ——そしてその殉教者を「天国」に昇らせるものであり——私達人間の感情が湧き出る永遠の泉なのだ！——その天国こそお前の生まれて来た所なのであり——これこそわたしの胸の中で働くお前の神性であり——なにか悲しい気の重い時には「わたしの魂はしり込みして破滅におそれおののく」⁵⁾ のではない——こういうのはただの言葉のあやに過ぎない！——そうでなくて、わたしは自分自身を越えた何か豊かな喜びや大きな悩みを感じるのであり——すべてはこの世の偉大な「感覚中枢」である神、貴方より生まれたものであり、もし私達の髪の毛一本が貴方の創り給うたはるかな土地の砂漠で地面に落ちたとしても、貴方は震えひびくのである。——貴方に感じて、わが友ユージュニアスはわたしが衰弱していると、カーテンを開けてくれ——それからわたしの病状について話をきいてくれ、彼も天気が悪いので神経にさわって困ることを話してくれる。貴方は、時には、荒涼たる山々を旅するがさつな農夫にもその一部を与え、農夫はひとの羊の群の中に傷いた小羊を見つける——そうすると彼は頭を杖にもたせかけてその小羊に同情してじっと見おろしている様子がみられる——あゝ！ もうすこし早く来て

いたら良かったんだが！——出血がひどくて助かるまい——彼の優しい心は小羊と一緒に血を流しているのである。

心の優しい田舎の若者に安らぎあれ！——わたしは君が悲しみながら歩き去るのが見える——しかし君の喜びは苦悩を消し去るだろう——というのは、君のささやかな家庭には幸せが溢れているし——共に住んでいる家族も幸福だし——君のまわりでたわむれている小羊達も幸せであるからだ。

夕 食

クラール山の登り口で引き馬の前足から蹄鉄が一つ取れそうになったので、御者は馬車から降りるとその蹄鉄をねじり取ってポケットに入れた。そしてその登り口は五、六哩あるし、馬だけが一番頼りになるものだから、わたしは蹄鉄をその場で出来るだけうまく付けてやるのが肝心だと思った。しかし、御者は釘を捨ててしまっていたし、御者席の下にある金づちも釘がなくては用を足さないで、わたしは仕方なくそのまま進むことにした。

この馬はまだ一哩と山を登らないうちに、石ころの多い道へ出ると二つ目の蹄鉄を失くしてしまったが、それも前足の片方から取れたものであった。それで、これは大変なことだとわたしは馬車から降りてしまった。そうすると、左手の方四分の一哩ほどの所に一軒の家が見えたので、やっとのことで御者を説き伏せてその家の所まで行かせた。近づいてみると、その家の外観とあたり一滞のたたずまいにまず安心して、その災難を忘れるほどであった。——それは小さな農家で、まわりに二十エーカー程の葡萄畑と同じ大きさ位の麦畑とがあって——家の近くの片側には、一エーカー半程の「野菜畑」があり、フランスの農家を充分自給自足させるあらゆる野菜が一杯に栽培されていた——別の側には野菜を調理する燃料を供給する小さな森があった。その家に着いたのは晩の八時頃であった——それでわたしは御者になんとか出来るだけ蹄鉄を付ける仕事をやってみるように言って——わたしの方はすぐその家へ入って行った。

その家の家族は、白髪頭の老人とその妻、五、六人の息子と婿達、それに彼らの数人の妻達、それからその賑やかな子供達であった。

みんなと一緒に食卓について^{ひら}扁豆のスープを食べているところで、大きな小麦パンが一つ食卓の真中にあり、葡萄酒の大きなびんが食卓の両端に置いてあり、これからの食事を楽しいものにするには確かだった——それは愛情のこもった晩餐であった。

老人は立ちあがってわたしを迎えると、食卓につくようにと心をこめて丁寧にすすめてくれた。わたしの気持は、すでに部屋に入った時同席したのも同様の状態になっていた。それで、その家の息子みたいにすぐ腰をおろして、出来るだけ早く息子の一人として振舞うために、早速老人のナイフを借りるとパンの塊を引き寄せてたっぷりと一切れ切り取った。そしてそうするうちに、わたしはその家族達の眼に、心からわたしを歓迎してくれている証拠だけでなく、わたし自身がそれをちっとも疑っていない様子への感謝をも含めて歓迎している証拠を見てとったのである。

この時の一口の食べ物をあんなにもうまくしたのは、こういう理由からだったろうか——或いはそうでなければ、自然の神よ、一体どんな理由がほかにあったのか教えて下さい。それから、わたしが食卓にあったびんから飲んだ葡萄酒の味が、いまになっても忘れられずに口に残っている程うまかったのは、どんな魔術によるものだろうか？

その夕食がわたしの好みにぴったりだったとすれば——その後でした神への感謝の祈りはなおさらわたしの好みに合っていた。

食後の祈り

夕食がすむと、老人はナイフの柄で食卓をたたき——ダンスの準備をするようにとみんなに言いつけた。するともうその合図がされた途端に、おかみさんや娘達は髪を結い直すために裏の部屋へ一緒に走って行き——若者達は顔を洗って木靴をはきかえるために戸口へと走って行った。そしてものの三分もたつと、全員が家の前の小さな広場に集まって用意が出来た——老人夫婦は最後に外に出てくると、わたしを中にはさんで、戸口の傍の芝生でできたソファに腰をおろした。

その老人は、五十年程前は、ヴィエル⁶⁾の名手であったが——この時も年齢からいえば踊りに充分用が足りる程うまく弾いた。そしておばあさんは時々曲に合わせてすこし唄い——それから中休みすると——子供や孫達が自分の前で踊っているので、また老人の楽器に合わせて唄うのであった。

二度目のダンスの途中になってのことだが、彼らみんなが一寸動きをやめて空を仰ぎ見るような様子から、わたしはただの喜びの原因や結果であるものと違う精神の高まりを見分けることが出来たと思った。——つまり「宗教」がその踊りの中に混じっているのを見たと思ったのである——しかし、わたしはいままで宗教がそういう立場におかれたのを見たことがなかったので、踊りが終わるとすぐに老人が話してくれなかったら、わたしを迷わせる想像から出た幻影の一つといまでも見なしていたであろう。いつもこうやって踊るのです。夕食が終ると家族を呼び集めて踊り楽しむのを生涯習慣にして来ました。それは、喜びにひたって満足している心が、無学な百姓の捧げることの出来る神への最高の感謝と信じているものですから、と老人は言った——

——それどころか、どんなに学のある偉いお坊さんでも同じことです、とわたしは言った。

微妙な問題

タラール山の山頂を極めれば、そのあとは一直線リヨンに馳けおる——そうするともうあわてて馬車を走らす旅は終わりである！ あとは注意しながら進む旅で、感じることを急がないのが心の旅路には得策というもの。そこでわたしは御者と、二頭のら馬でゆっくりとやって、サボイを通過してトリノへとわたしを馬車で無事運んでくれるという契約を結んだ。

貧しいが辛捧強く、静かで正直な人達よ！ 気にすることはない、あなた達の貧しさは、素朴な徳性の宝庫であって、世間から妬まれることもないし、あなた達の住む谷が世間に侵されることもないだろう。——自然を司る神よ！ 貴方は貴方の生んだ無秩序の中にあっても、貴方の創り出した欠乏というものにはいつも親切であり——貴方は自分のまわりに大きな仕事を持っているの

で、大鎌とか小鎌とかを使う者にはほとんど与えるものを残さないが、その与えたものには安全さと保護とを加える。それで、そのように保護されて農夫達の家々には楽しさがあるのだ。

歩くのに疲れた旅人は、辿って行く路の突然の曲折や危険——岩山——断崖——登りの難かしさ——下りの恐ろしさ——手にあまる難儀な山々——大きな岩を山頂から転がし道を塞ぐ奔流，などについての愚痴を思うさまこぼした方が良い。——サンミシェルとマダヌの間では，農民達がこういった岩や石を取り除こうと終日働いていた。そしてわたしの馬車がその場所に着いてからまる二時間もたたなければ，工事が終わり道がなんとか通れるようになりそうもなかった。じつと辛棒強く待つほかはなかった——雨が降る風の強い夜であったので，遅くなったこととその天候のために，御者は予定の宿場よりも五哩手前の所で，道傍の小ざれいな宿屋に泊らなければならないことになった。

わたしはすぐに寢室をとって——火を暖かく燃やし——夕食を注文した。そうして，まづ助かったと神に感謝を捧げていると——その時一台の馬車が一人の婦人と小間使いを乗せて到着した。

この宿にはほかに全然寢室がなかったので，宿のおかみはたいした遠慮もなく二人の女性をわたしの部屋に連れて来て，中に案内すると，ここのお客様はイギリスの旦那様がお一人だけで——良い寝台が二つあります，それにこの部屋にはもう一部屋奥にありまして，そこにもう一つ寝台が御座います，と説明した——この三番目の寝台についておかみの言った口振りからでは，これはあまり良いものではないらしかった——しかし，おかみの言うには，寝台が三つありお客も丁度三人だけというわけだった——ですから，きっとこの旦那様が適当にやりくりをなさって下さるでしょう，と言った。それでわたしはその婦人にこの事についてまったく考察を下す暇を与えないで——わたしが出来るだけのことをしてみましよう，とすぐさま宣言したのである。

こう言ったとしても，わたしは自分の寢室を全面的に明け渡したことではないので，やはりこの室の主人として泊り客には礼を尽す権利を持つ者であると考えた——そこでその婦人にお坐わり頂こうと——一番暖かい席に落ち着かせ

——宿の者にもっと薪を持って来させ——宿のおかみに、夕食の献立をもっとふやすことと飛びきり上等の葡萄酒をつけることとを頼んだ。

その女性は暖炉で五分と暖まらないうちに、ふりむいて寝台の方を眺め始めたが、やがてその方へ眼を向ければ向けるほどますます当惑しているような顔付きになった——わたしは彼女の気持にも——自分自身の気持にも共感を覚えた。というのは、しばらくすると、彼女の顔付きからも事態そのものからも、その婦人とまったく同じ程度にわたし自身も困惑してきたからである。

私達の寝なくてはならない寝台が同一の部屋にあるということだけで、それだけで充分こういう感情を引き起すものであった——ところが、寝台の位置がまず平行に並んでいて、しかもその間が小さい柳細工の椅子一つしか置けない程くつついているので、事態は私達にとって一層重苦しいものになった——さらに、寝台は暖炉の近くにあったので、片側には煙穴の突出部があり、もう一方の側には大きな梁が部屋を横切っていて、寝台のところを一種の小部屋のように仕切ることになっているので、どうみても私達の細やかな感情には好ましいものではなかった——それにもう一つ付け加えれば、二つの寝台は非常に小さなものだったので、その婦人と召使いが一緒に寝ることなどは考えも及ばないことであった。しかしもし出来たとして、二つの寝台のどちらかに二人が寝るとすれば、わたしが彼女達の傍に寝たとしても、これは望ましいものではないけれども、別に想像するだけでも苦しくなるような、怖ろしいことは何一つなかったのである。

奥の小部屋について言えば、それは私達にとって慰めにならない代物だった。湿気の多い寒々とした小部屋で、窓の鎧戸は外れかかっている、おまけにその窓にはその夜の風雨を防ぐガラスもなければ油紙もはってなかった。婦人がその部屋を覗いてみた時、わたしは咳が出るのを抑える気にもならなかった。そこで当然、問題は次の二つの方法のどちらかを選ぶかということになった——つまり、婦人は感情のために健康を犠牲にし奥の小部屋をとり、わたしの隣の寝台を小間使いに渡す——或いは、その娘が小部屋をとって云々。

その女性はピエモンテ生まれの三十才ばかりになる人で、頬は健康では照っ

ていた。——小間使いはリヨン生まれで二十才，いかにもフランス娘らしく，きびきびとして生气に溢れていた。——旅行くいたる所に色々な困難があったが——私達をこんな苦境に追い込んだ道路の岩石も，農夫達に取り除こうとしていた時には非常に大きなものに見えたけれども，いま私達の前に横たわった障害に比べれば，ほんの小石にすぎないものであった——そしてこの事だけはつけ加えておかななくてはならないのだが，私達が二人ともあまりに繊細であったので，この事態についてはお互いに考えを交わすことが出来ず，それが私達の心にのしかかっている重荷をちっとも軽くすることが出来なかったことである。

私達は夕飯の食卓についた。そしてサボイのその小さな宿屋にあった葡萄酒よりももっとうまい酒がなかったら，私達の舌はしゃべる必要に迫られるまで動くことはなかつたらう——ところが，その婦人は自分の馬車にバーガンディ産の葡萄酒数本を持っていたので，小間使いをやってその中から二本を取って来させた。そこで夕食が終わって，私達だけになってしまう前に，すくなくともお互いの立場について遠慮なく語ることの出来るような威勢のいい気分になっていた。私達は事態をあらゆる面から捉えて，二時間にわたる交渉の過程であらゆる見解から討論し考察を加えた。そうしてそのあげくに，私達の間遂に条約の項目が決定され，平和条約の形式で明記されたのである——そしてわたしは，いままで昔から子孫に承継がれて来たどのような榮譽ある条約にも劣らず，この条約はお互いの信仰と信頼によって結ばれたものと信じる次第である。

その条約は次の通りである。

第一条。寢室の権利は紳士側にあり——且つ彼は暖炉に近い寢台を最も暖かきものと認めるので，婦人側でこの寢台を占有するよう譲歩することを主張する。

婦人側では，条件付きでこれを容認する。その条件とは，寢台のカーテンが薄く透き通った木綿製であり，また幅が短かく密閉出来ないので，小間使いが大型ピンか或いは針と糸とをもって紳士側に充分な障壁と見做されるよう，そ

の隙間を閉じること。

第二条。紳士側は部屋着のまま終夜寝に就くことを婦人側から要求する。しかしこれは拒否される。理由は、紳士側は部屋着を持ち歩くような身分でなく、旅行鞆の中にはシャツ六枚と黒絹のズボン一着しか入っていない為である。

絹のズボンに言及されたことから、この条項は全面的に変更された——それは、ズボンが部屋着に匹敵するものと認められた故である。そしてわたしは、一晩中、黒絹のズボンをはいたまま寝ることが規定され承認された。

第三条。紳士側は床に就き、火が消された後は、終夜一言も口を利いてはならないことが婦人側より主張され規定される。

これは承認される。但し、紳士側がお祈りを唱えることは、条約の違反と見做されない。

この条約では、たった一つ忘れられていた点があったが、それは婦人とわたしがどんな風にして服を脱ぎ床に入るべきかということであった——その方法はたった一つだけあったが、それは読者の御想像にお任せする。ただ、その方法が慎しみを欠くような性質のものなら、それは読者自身の想像力の罪であるとわたしは断乎抗議するつもりである——そしてわたしがそういう読者諸賢の罪に文句を唱えるのは、これが始めてではない。

さて、私達が床に就いた時、慣れない状況のためか、どういうわけか分からないが、とにかくわたしは眼を閉じることが出来ず、こっちを向いたりあっちを向いたり、何度も寝返りをうって、深更をまる一時間ばかりたった時、もう性も根も尽き果てて——あゝ神様！　と思わず言ってしまった——

——あなたは条約違反ですわ、と婦人が言ったが、彼女もわたし同様眠れないのであった。——わたしは平謝りにあやまったが——これはただの発作的な叫びに過ぎないと主張した——ところが彼女は、それは完全な条約違反であると主張した——それでわたしは第三条の条文には但し書があることを主張した。

その婦人は決して自説を主張することをやめなかったが、かえってそのために自分の障壁を弱めることになってしまった。というのは、あまり議論に熱中

すぎて、大型ピンが二、三本カーテンから床に落ちる音がわたしに聞えたのである。

奥様、誓って申しますが、とわたしは言っ——断言するつもりで腕を寢床から突き出した。

——(どんなことがあっても、どんなささいな礼節をもこれを破るつもりはありません、とわたしは付け加えようとしていた)——

——ところが小間使いは、私達の間のやりとりを聞くと、これはそのうち喧嘩になりはしないかと心配して、そっと小部屋から出て来たが、まっくら闇だったので、私達の寝台のすぐ近くまでしのび寄ってくると、寝台の間の狭い場所に迷い込んでしまい、遂に彼女の主人とわたしの間に入って一列に並ぶ恰好になっていた——

それでわたしが腕を突き出すと、掴んでしまったのは小間使いの

(第二巻終り)

[完結]⁷⁾

注

- 1) 啓示宗教 (revealed religion); 人間の理性に基づく自然宗教に対し、神の恩寵に基づくものとする。
- 2) 第一原因 (first cause); 宇宙の第一原因、つまり宇宙の創造主、神。
- 3) 友人シャンディ; *Tristram Shandy* (IX) Chap. 24 に Tristram がこの Maria に出会った話が書かれている。
- 4), 5) Joseph Addison (1672~1719) の悲劇, *Cato* 5, i より引用。
- 6) ヴィエル (vielle); 小さな車を廻して演奏する四絃琴 (OED)。しかし *I See All* には “viol” の初期の形とあり、13 世紀フランスの viol の絵が掲げてあるが、それは現在のマンドリンに似ている。尚、Stout 版に掲載されている plate 12 を見ると、ヴァイオリン、マンドリンの類には似ても似つかぬ、むしろ手風琴の形に近いように見える。
- 7) [完結]; 訳者附記

A Sentimental Journey の成立と特質

——あとがきに代えて——

この日本語訳は、最初の註に記した如く、G.D. Stout, Jr. 版 (1967) を底

本とし、Oxford English Novels 版 (1968) World Classics 版などを参考にして訳出したものである。この作品の和訳はすでにすくなくとも四種が数えられるようである。作家牧野信一もこの作品に非常な興味を持ったようで、彼の作品の中に *Journey* 序文中の Travellers の種類を如何に訳すのが適切かに苦心している条りがあり、作品名を「風流旅行記」と訳している¹⁾。しかし彼が全訳を意図していたかどうかは推測出来ない。題名訳も「感情旅行」「風流漂泊」「旅多感」など様々考えられて来ており、之等の大先達諸氏の訳に拙訳を加えるのは、屋上屋を架すも甚だしい話である。それにも拘らず、私が今回この挙に出た理由は、一つには前記訳書がすくなくとも三十年程前に訳出されたものであり、それぞれ Sterne に傾倒し研究を重ねた学者諸賢に依るもので、訳文があまりに高雅、華贍、彫琢鏤刻を重ねた文章であって、現代の一般読者と縁遠いものになっていると思われること。更に前掲テキストが近年相継いで出版され原作の定本化をみたことの二つの理由によるものである。そこで拙訳は出来るだけ平明な口語体を用いることを第一の心掛けとした次第である。始め、その平明さを考えるあまり、原文の特色である数多いダッシュ、間接話法、描出話法による会話表現、などを全部現代一般小説風に改装して読み易くすることも試みたが、矢張り之等の特色を捨てることは出来なかった。結果は、かえって原文の punctuations を尊重するのあまり、直訳的訳文が数多く入る仕儀となり、平明流暢な訳文とは程遠いものになってしまった²⁾。尚、訳出に当って前記諸訳書と共に「研究社英文学叢書」の岡倉由三郎氏註釈版 (1931) 及び「開文社英文名著選集」の吉田新一氏註釈版 (1963) を参照させて頂いた。特に後者は原作全体の 1/3 の部分を選んで詳細な註を付け、現在でも教室で読める様按配されている好著であるが、すでに絶版であると聞くと残念この上もない。如何に 18 世紀の小説が英文科の教室でないがしろにされているか、推測出来ようというものである。

本題に戻って、この原作品を一瞥してみることにする。副題「フランスとイタリーを巡る……」とあるように、作品の最初の意図ではイタリーへの言及も含めて全四巻で完結する予定であった。しかし作者の健康上の理由でフランス

を旅する一、二巻で一応完結し、1768年2月末日に出版された。その後一ヶ月を経ずして作者が死亡してしまったので、未完の作品とも見ることも出来る。しかし作者自身、出版の前年執筆中にすでに死期の迫りつつあるのを感じ取っていたので、作者としてはこの二巻を以て *Journey* の脱稿を意識していたであろう。二巻最後の尻切れトンボの文章は、ただ、Sterne の *Shandeism* の常套手段に過ぎないように思われる。

Journey は Sterne 自身の二回に亘るヨーロッパ大陸への旅、主に第一回目に基いている。彼がまだ若い田舎牧師であった1744年に“Chaplain to the Right Honourable Charles, Earl of Aboyne”となったことがあるので、その息子の Charles Gordon の tutor となって Grand Tour に出掛けたという推測もあるが、これは現在否定されている³⁾。この推測は *Shandy* 第一巻 11章の次の文に依るところも大きい。

“I had just time, in my travels through *Denmark* with Mr. *Noddy's* eldest son, whom, in the year 1741, I accompanied as governor, riding along with him at prodigious rate thro' most parts of Europe, and of which original journey perform'd by us two, a most delectable narrative will be given in the progress of this work.”

(*Shandy*, Vol. I, Ch. 11)⁴⁾

この予告に従ってとは言い難いが、*Shandy* 第七巻と八巻の一部に、Tristram Shandy 一家のヨーロッパ旅行記が描かれる。この旅行記は *Shandy* 五、六巻の評判が芳しくなく、それを挽回する意図の下に、第一回目の大陸旅行中と帰国後に苦心惨澹して書かれたものである。

彼の第一回目の旅行は1762年1月末 Paris へ行き妻と娘 Lydia を呼び寄せ約6ヶ月の滞在後 Toulouse へ転地、病状好転しない為63年に保養地 Montpellier に落ち着く。翌年3月妻子を残して Paris に帰りその後2ヶ月あまりして帰国の途に就き、9月に Coxwold の牧師館 *Shandy Hall* に帰った。この旅は *Shandy* 七巻に描かれているように、当時の馬車旅行の難儀をまともに受け、又 *Shandy* 続巻を書く苦労も手伝い、第一の目的であった健康回

復などとは程遠い性質の旅となった。翌 1765 年、例によって年明け早々 *Shandy* 七、八巻の出版をみる。それ故、この第七巻に於ける旅行記は第一回の旅に依るものである。第二回目の旅は、同年 10 月初めイタリーを目指して出発、Paris を経て 11 月中旬 Turin に到着、イタリー各地を歴訪 66 年 5 月フランスに帰り、6 月 Coxwold に帰った。この旅行の方が健康状態は良く、何通かの手紙にもその快適な気分を反映している。

“I got here in 5 days, much recovered by my Journey” (Letter No. 152); “I find myself infinitely better than I was—and hope to have added at least ten years to my life by this journey to Italy...” (Letter, No. 157) “I am much recover’d in my health, by the Neaplitan Air...” (Letter, No. 162); “Never man, ..., has had a more agreeable tour than your Yorick...” (Letter, No. 169) etc⁵⁾.

第一回目の旅を基にした *Shandy* 第七巻と、比較的快適な旅を楽しんだ後で書かれた *Journey* とでは、表面的にもそれぞれの旅の気分の差が見られるのは当然であろう。併し、基本的には両者は全く違った意図を持ったものであり、形式的にも、一方は語り手 Tristram の述べる *Shandy* 一家 (父 *Shandy*, 叔父 *Toby*, 従僕 *Trim*, 召使 *Obadiah*) の大陸旅行、一方は *Yorick* を名乗る牧師の一人旅である。前者の意図は次の手紙からも窺い知れる。

“I will contrive to send you these 2 new Vols of Tristram, as soon as ever I get them from the press—, You will read as odd a Tour thro’ france, as ever was projected or excuted by traveller or travell Writer, since the world began—tis a laughing good tempered Satyr against Traveling (as puppies travel)...” (Letter, No. 134)⁶⁾

つまりは、当時全盛を極めた Grand Tour 又はその記録的旅行記への satire を目的としたものだが、その目的をあまり前面に押し出した為、時には burlesque の域を越えた indecent degression にも遊び過ぎ全体としてのまとまりにも欠けている。ただ注目すべきは、大陸旅行途次の困難さをかなり克明に書きながらも、「目前の事態を冷静に受けとって……よいも悪いも路上にわが身

にふりかかるままに受けとって先に進む』⁷⁾ といった基本的態度が見られることである。「苦虫をかみつぶした気持でいれば、何ものもあまりこちらに好意を持つようには映らない』⁸⁾ という態度は、*Journey* になってもつと積極的に表現されるものである。

1767年の1月に *Shandy* 第九巻を出し、その中に *Moulines* の *Maria* の話を挿入している。その語り口は意外に淡々として、*Maria* に同情する若い御者は、*Journey* の *La Fleur* を思わず善良な若者である。この条りは完全に *Journey* に引き継がれることを意識している。

“—I shall publish but one this year, and the next I shall begin a new work of four volumes, which when finish'd, I shall continue *Tristram* with fresh spirit.” (Letter, No. 169)

と書いたのは1766年の7月23日である。この時は気分的に特に健康状態の良かった時であった。そしてその年の6月には rival である *T. Smollett* の *Travels* が出版されていたのである。67年 *Shandy* 第九巻を出した後、*Journey* の予約講読をつのる⁹⁾。同年5月下旬 *Coxwold* に帰り *Journey* 執筆にとりかかる。

Journey 序文の中で主人公 *Yorick* は次のように言っている。並の旅行記は眼中にない。

“...both my travels and observations will be altogether of a different cast from any of my forerunners”¹⁰⁾

この自負は、外面的に風変りな作品だけにとどまらず、質的に当時の記録的旅行記から近代に飛翔することが、作品の中で明らかにされる。

題名の“*Sentimental*”にしてからが、その名詞形“*sentiment*”は *OED* の語義 9; a によれば、「洗練された優雅な感情、感受性の運用、発露;……」の意で、最初の用例は *Journey* 開巻早々、*Yorick* がフランス人の気質を讃えた条り“...so renown'd for sentiment and fine feeling...”の個所が引用されている。「豊かな情操」といった意味合いだろう。形容詞になると、*OED* の「始

め良い意味で使われたもの：洗練され高揚された感情を特徴としたり示したりする。……」という語義にはほぼ相当するであろう。この言葉が 1740 年代後半から流行し出したのは有名だが、その “sentimental” に “refined feeling” の内容を加えてヨーロッパ大陸にまで流行させたのは *Journey* に外ならない¹¹⁾。*The Century Dic.* も、1767 年 11 月の Sterne の書簡一節を引用している。題名の内容を原文から借りれば次の一節がそれに相当するであろう。

“—’tis a quiet journey of the heart in pursuit of nature, and those affections which rise out of her, which make us love each other—and the world, better than we do.”¹²⁾

そしてこれに呼応する書簡中の意図は次の Mrs William に出した 1767 年 11 月 12 日付の一節に見出される。

“I told you my design in it was to teach us to love the world and our fellow creatures better than we do—so it runs most upon those gentler passions and affections, which aid so much to it—”

(Letter, No. 218)

編者 Curtis も註の中で「Sterne は Wordsworth と同じく心の情愛をさらけ出そうと努めている。」と付け加えている¹³⁾。別の言い方をすれば *Shandy* に表現されている True Shandeism を具えた Yorick が、更に “sentimentality” と “philanthropy” とを手掛りにして、人間の内面だけに向って旅する記録なのである。

それ故、Yorick には歴史的時間の長さなどという外的観念はない。一人の distresses に満ちたような女性と出会えば、彼は Calais の町に一時間そこそこしかいないのに、全頁の 1/4 近くも費してしまうのである。Calais の町の魅力からでなく、其処には、a widow, a monk, それに “spleen” に満ちた旅ならば唾棄すべき landlord などの、Sentimental Traaveller にとっては魅力ある人物達が存在したからである。此処では、Calais の町は、“the town clock” が午後四時の時を知らせる狂言廻しに過ぎない。行く先々の町々皆然り、

Montriuil は La Fleur という生命力に溢れた心暖かいフランス青年を従僕として発見する場所であるし、Nampont は死んだ驢馬に対して愛情を吐露する貧しい男に出会う所である。やっと到着した大都会 Paris の街の描写も殆んど見られない。*Shandy* 第七巻のあの情容赦のない写実も全く鳴りをひそめ、Yorick の眼を魅くものは、ただ人間、特に女性を主とした生き物だけである。而もそれは、上流階級の紳士淑女達よりも、小粋な “grisset”, 可愛い “*fille de chambre*”, 男気のある “old officer”, 生活の知慧に徹した “beggar” などである。

“I count little of the many things I see pass at broad noon day, in large and open streets—Nature is shy, and hates to act before spectators; but in such an unobserved corner, you sometimes see a single short scene of her’s worth all the sentiments of a dozen French plays compounded together—¹⁴⁾

これが “Sentimental Traveller” の辿るべき道筋である。その道傍に見られる maudlin な部分もかなり誇張されて書かれている点から、Sterne が当時の風潮に迎合して、いわゆる現代的な意味での sentimental な場面を挿入したと言われている。例えば *Shandy* 七、八巻に対する *Monthly Review* 誌掲載の Ralph Griffiths による批判、Sterne の卓越した点は pathetic な面にあり、すでに Shandeism は大衆に飽きられている。“none but amiable or worthy, or exemplary characters” を持った新しい作品を作るべきである、といった批評¹⁵⁾も彼の *Journey* 執筆の心の一隅に響いていたかも知れない。

併し、作品全体の構成を見ると、その点で最も悪評を受けている “Nampont, The Dead Ass” の場面も、次の “The Postillion” になると全く反対の burlesque 風に変転し、又後半の “Maria Moulines” の中でも最も肝心なお涙頂戴の場面で、ハンカチのやりとりという例の shandy style が繰り返され、その後又例の “sensibility” に呼びかける大広舌が始まるのである。そして彼は手紙の中でも読者の涙を意識し期待している。

—but I have something else for you, which I am fabricating at a

great rate, & that is my Journey, which shall make you cry as much as ever it made me laugh—or I'll give up the Business of sentimental writing—& write to the Body (Letter, No. 219)

之等の諸相を念頭に入れて読むと、先に書いた「“sentimentality”と“philanthropy”とを手掛りにして云々」の二つの単語の前にそれぞれ“sophisticated”という形容詞を、私は付け加えたいくなるのである。

注

- 1) 牧野信一「風流旅行」(「牧野信一全集」, 人文書院, 1962), 第三卷, P. 290.
- 2) Stout 版及び World Cassies 版は passage 毎に一行開けているが、紙面の都合上これには従わなかった。以下作品名は *Journey* と略す。
- 3) W.L. Cross も, surmise されるかも知れぬと言っているが、最近の詳細な調査はこの事実を否定している。A.H. Cash, *Laurence Sterne: The Early and Middle Years* (London, 1975).
- 4) J.A. Work, ed., *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman* (New York, 1960) P. 24~5 以下 *Shandy* と略す。
- 5) L.P. Curtis, ed., *Letters of Laurence Sterne* (1935; rpt. Oxford, 1965) による。以下 Letter, No. のみを附記する。
- 6) Curtis は附注で “one of the most brilliant sections of *Tristram Shandy*, vol. vii, was in substance a burlesque of the French guide-book of this period, the *Nouvelle Description de la France* by Piganiol de la Force…” と賞讃している。
- 7), 8) Work, *Shandy* P. 485, P. 497. 訳文は朱牟田夏雄氏訳を借用。
- 9) “I am going to publish a *Sentimental Journey* through *France & Italy*—the undertaking is protected & highly encouraged by all our *Noblesse*—& at the rate tis subscribed—for, will bring me a thousand guineas (au moins)—twil be an Original—in large Quarto—the Subscription half a Guinea—…” (Letter, No. 182).
- 10) Stout, *Journey* P. 82.
- 11) D.W. Jeperson, *Laurence Sterne* (Writers and their Works No. 521) P. 26 で、著者は Sterne がフランス語の “sentiment” の意味するものを、英語の “sentimental” に結び付けたものであろうと推測している。
- 12) Stout, *Journey* P. 219.
- 13) Curtis, *Letters* P. 401.

センチメンタル ジャーニー (完)

- 14) Stout, *Journey* P. 257.
- 15) Alan, B. Howes, *Yorick and the Critics* (New Haven, 1958) P. 19.